

様 式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19（共通）

科学研究費助成事業 研究成果報告書



平成 30 年 6 月 28 日現在

機関番号：22304

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2014～2017

課題番号：26671038

研究課題名（和文）乳幼児虐待予防のアセスメント指針と看護介入プログラムの開発に関する研究

研究課題名（英文）Study on development of assessment guidelines and nursing intervention program for prevention of child abuse

研究代表者

大澤 真奈美（OSAWA, MANAMI）

群馬県立県民健康科学大学・看護学部・准教授

研究者番号：50331335

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,600,000 円

研究成果の概要（和文）：乳幼児虐待予防のアセスメント指針および看護介入プログラム開発を目的に、保健師を対象に全国調査を行った。その結果母子手帳からの情報収集、問診・保健指導からの情報収集、アンケートの記載内容、母親・子ども・親子関係の観察、子どもの身体測定や診察、の場面から成るアセスメント指針と、母にとって看護職が信頼できる人になる、育児への自信を持てるよう家事育児の方法を伝える、子どもとの愛着形成を促す、生活基盤を安定させる、家族関係を良好にする、アウトリーチを中心とした関りを継続する、問題状況に応じて他機関と連携する、という母親の育児能力の形成の促しを中核に置いた看護介入プログラムが完成した。

研究成果の概要（英文）：A nationwide survey was conducted for public health nurses with the aim of developing assessment guidelines for infant abuse prevention and nursing intervention programs. As a result, assessment guidelines consisting of scenes of gathering information from the maternal and child handbook, gathering information from inquiries and health guidance, contents of questionnaires, observing mothers, children and parent-child relationships, children's physical formulation and examination, and nursing care. Mainly focusing on outreach, to make the job trustworthy, to convey confidence in childcare, to convey the way of child-rearing, to promote the formation of attachment formation with children, to stabilize the foundation of life, to improve family relations, The nursing intervention program which centered on the promotion of mothers' childcare ability to cooperate with other institutions according to the problem situation was completed.

研究分野：公衆衛生看護

キーワード：乳幼児虐待予防 アセスメント 看護介入

1. 研究開始当初の背景

(1) 近年、少子化や核家族化の進行、女性の社会進出などを背景とし、育児を行う母親の育児不安が増大し、子どもへの虐待は子どもと家庭をめぐる保健福祉の重要な課題となっている。児童相談所への相談対応件数は増加の一途をたどっており、その対策は緊急の課題である。

(2) 国の示す子ども虐待対応の手引きでは、子ども虐待は誰にでも起こり得ることを意識したうえで、虐待予防と早期発見の視点を強化し、潜在リスクのある母子を早期に発見して予防のための介入を行う必要性を述べており、その方法の1つとして市町村の母子保健事業における乳幼児健診をあげている。市町村保健師は問診や保健指導の場面において、乳幼児に対する母子の虐待の潜在リスクのある対象に関わり予防的な介入を行うことが期待されている。

(3) 乳幼児健診での虐待予防・早期発見のアセスメントでは、“母親の児への不適切な関わり”と“気になる児”の発見が重要と考えられている。しかし、潜在リスクのアセスメントを明確に示した先行研究はなく、市町村保健師は自らの経験知を拠り所として実施している現状がある。

2. 研究の目的

(1) 看護学の独自の観点から、乳幼児虐待予防の潜在リスクを“母親の児への不適切な関わり”と“気になる児”の観点から幅広く確実に捉え、アセスメントする指針を作成する。

(2) 母親の育児力の形成を中核においた、乳幼児虐待予防に向けた看護介入プログラムを開発する。

3. 研究の方法

(1) 「児童虐待」「乳幼児虐待」「予防」「アセスメント」をキーワードとして過去およそ10年間の国内外の文献を検索し、計108件の文献から、虐待の潜在リスクとして記述された「母親の児への不適切な関わり」及び「気になる児」に関わる記述内容を抽出し、健診時のアセスメント項目として整理した。そして本調査のためのアセスメントの枠組みと項目を検討し、調査用紙を作成した。

(2) また「児童虐待」「乳幼児虐待」「予防」「看護介入」をキーワードとして過去およそ10年間の国内外の文献を検索し、計108件の文献から虐待予防に向けた看護介入に関わる記述内容を抽出し、整理した。そして本調査のための看護介入の枠組みと内容を検討し、調査用紙を作成した。

(3) 保健師4名にパイロットスタディを実施し、調査用紙を完成させた。全国の200市町

村を選定し、母子保健主務者あてに調査書を5部、合計1,250部郵送した。母子保健主務者から該当する所属内保健師を選定してもらい、配布を依頼した。記入後の調査書は個別に郵送で返送してもらった。

(4) データ収集期間は平成28年12月～平成29年1月とした。なお本研究は研究者の所属大学の倫理委員会の承認を得て実施した(健科大倫第2016-20号)

(5) 調査書は合計407部の返送があった(回収率32.6%)。本調査により得られたデータは、量的及び質的に分析した。

4. 研究成果

(1) 乳幼児健診における虐待予防の潜在リスクを観察する場面は、〔母子健康手帳からの情報収集〕〔アンケートの記載内容〕〔母親の観察〕〔子どもの身体測定と診察〕〔子どもの観察〕〔親子関係の観察〕の6つの場面に整理できた。

(2) 6つの観察場面におけるアセスメント項目は、〔母子健康手帳からの情報収集〕の場面では、家族構成(離婚歴、母子家庭、継父・異父兄弟の存在、若年の母、他4項目)、過去の健診や予防接種の受診状況(妊婦健診未受診、必要な予防接種を受けていない、他1項目)、暮らしぶり(頻回な転居・転居による孤立、母親が就労している、他2項目)、出生時の状況(未熟児・低体重児)であった。

〔問診・保健指導からの情報収集〕の場面におけるアセスメント項目は、育児態度(児の世話をしない、子どもの具合が悪くても病院に連れて行かない、他17項目)、夫との関係(夫婦間の不和がある、父親の育児協力が得にくい、他17項目)、母親の健康状態(母に基礎疾患がある・精神科受診歴がある、母親の健康状態が悪い、他4項目)、児への関心(子どもへの関心が低い、他3項目)、育児負担感(育児負担が強い、他3項目)、母の生い立ち(母の成育歴に問題、母自身に被虐待歴がある、他1項目)、暮らしぶり(経済的困難、近隣から孤立している、他2項目)、子どもの問題を認めない(発達の遅れがあっても相談しない・認めない、他2項目)、他の家族関係(祖父母の育児協力が得にくい、他2項目)、他者との交流(人づきあいが苦手、他1項目)、父親の行動(父親の育児参加が少ない、他2項目)、児への接し方(子どもが泣くと腹が立つ、他1項目)、育児不安、育児への質問が多い、育児相談の相手がいない、育て方がわからない、サービス活用に拒否的、であった。

〔アンケートの記載内容〕の場面におけるアセスメント項目は、妊娠中の胎児への気持ち、妊娠出産の満足感が低い、育児に自信がない、子育ての満足感が低い、であった。

〔母親の観察〕の場面におけるアセスメン

ト項目は、児への接し方（子どもを気にかけないなど子どもに対して関心が低い、子どもを否定する発言をする、他 8 項目）、母親の態度・行動（たばこの臭いや派手な服装など身なりに違和感がある、きょうだいへの対応に差がある、他 6 項目）、育児態度（育児の手技がいつまでも上手にならない、他 3 項目）、母の健康状態、であった。

〔子どもの身体測定と診察〕の場面におけるアセスメント項目は、不適切な世話（体重が順調に増えていない、服が汚れている、他 5 項目）、身体の怪我や傷（身体に怪我やあざがある、他 2 項目）、発達の遅れ（発達の遅れ、他 1 項目）、疾患や障害、頻回な罹患・外傷、出生時の状況、痛みを訴えない、他 6 項目、であった。

〔子どもの観察〕の場面におけるアセスメント項目は、児の多動性・衝動性、親や他者への接し方、情緒的発達の問題、発達の遅れ、児の性的に不適切な行動、発達段階にあわないうっかりした態度、子ども同士で上手に遊べない、暴力的な態度・行動、基本的生活習慣の未確立、兄弟の行動、他 10 項目、であった。

〔親子関係の観察〕の場面におけるアセスメント項目は、親に対して委縮する（親の顔を窺い、びくびくする）、アイコンタクトがない（母子のアイコンタクトがない）、児へ適切に対応できない、であった。

そしてアセスメントはただ 1 項目の内容のみでされるのではなく、複数の組み合わせなどから総合的に判断していた。

(3) 保健師の行う乳幼児虐待予防に向けた看護介入プログラムは、〔母にとって保健師が信頼できる存在になる〕が前提となり、〔母親の育児能力の形成を促す〕〔育児を行う家庭環境を良好にする〕を目的とした看護介入を行う。そして〔アウトリーチを中心とした関りを継続する〕〔問題状況に応じて他機関と連携する〕を看護介入の手段としていた。

(4) 看護介入の前提となる〔母にとって保健師が信頼できる存在になる〕は、＜母の話を受け止め、寄り添う＞＜母親との心地よい関係をつくる＞＜母親の困っていることに対応する＞＜家事や育児の母親なりの努力や頑張りを認める＞に整理できた。

介入の目的である〔母親の育児能力の形成を促す〕は、＜育児への自信をもてるように家事育児の方法を伝える＞＜子どもへの愛着形成を促す＞に整理でき、さらに＜育児への自信をもてるように家事育児の方法を伝える＞は、育児・家事の知識や具体的方法を提供する、育児サポートの情報を提供する、家事・育児を共に行う、育児方法のモデルを示す、に整理できた。また〔育児を行う家庭環境を良好にする〕は、＜生活基盤を安定させる＞＜家族関係を良好にする＞に整理できた。

看護介入の手段は〔アウトリーチを中心とした関りを継続する〕〔問題状況に応じて他機関と連携する〕から成り、さらに〔アウトリーチを中心とした関りを継続する〕は、＜アウトリーチを中心に関わる＞＜定期的に家庭訪問する＞＜子どもを入り口として家庭訪問する＞＜生活に合わせた具体的援助を行う＞に整理できた。

(5) 本研究では、乳幼児虐待予防に向けて、活用可能なアセスメント指標を「母親の児への不適切な関わり」および「気になる児」の視点から開発した。本アセスメント指標の活用により、虐待予防が必要な潜在する対象を幅広く把握でき、確実な予防に繋げることができる。また乳幼児虐待予防のリスクのある母子に対する看護介入プログラムを開発した。本プログラムの活用により、経験の少ない保健師であっても確実に効果的な介入を実施できると考える。

(6) 本研究成果から示唆された課題の 1 つは、育児の長期的な経過で重点を置く支援内容が変化すること、またアウトカムは虐待や育児破綻の予防であるが、母親への成果指標は「育児能力の向上」であった。またもう 1 つの課題は、虐待が危惧される母親の中には対応が極めて困難なケースが含まれ、特に精神障害等の疾患や障害を持つ母親への支援には多くの困難が生じていた。このことから精神障害等を持つ母親が母子関係を維持し、育児を継続できるよう、育児の経過に沿って育児能力形成につながる看護援助モデルのさらなる開発が急務であると考えられた。

<引用文献>

岩清水伴美他、子供虐待ハイリスク家庭の継続支援の要点と課題 市町村保健師とのケース検討会から、聖霊クリストファー大学看護学部紀要、21 号、1 - 11

唐田順子他、産科医療施設（総合病院）の看護職者が「気になる親子」を他機関へ情報提供ケースとして確定するプロセス 乳幼児虐待の発生予防を目指して、日本看護研究会雑誌、37 巻 2 号、49 - 61

井上みゆき他、母親の主観的虐待感と個人的要因および市区町村の対策との関連 健やか親子 21 の調査から、小児保健研究、73 巻 6 号、818-825

寺本ゆみ他、大学病院勤務の看護師における子育て支援への積極的アプローチ 小児病棟の入院患者家族によるアンケート分析、子どもの虐待とネグレクト、16 巻 1 号、78-87

大平肇子他、子ども虐待予防の先進的 B 地域における看護職の子ども虐待に対する認識とアセスメント、四日市看護医療大学紀要、7 巻 1 号、29-38

石原あや他、子ども虐待の早期発見・予防的支援のために看護職が重視する子どもと家族の言動や状況 看護職の背景要因による比較、

- 兵庫医療大学紀要、1 巻 1 号、69-78
- 飯田加寿子他、すべての看護職が使える子ども虐待予防活動のためのアセスメント指標の開発と効果判定（第 1 報） A 県の看護職における子ども虐待に対する看護職の認識の概要、四日市看護医療大学紀要、6 巻 1 号、9-17
- 細井智子他、母親のしつけの認識に関する研究、保健師ジャーナル、69 巻 5 号、378-385
- 鈴井江三子他、学童保育指導員による児童虐待の発見に関する実態調査、小児保健研究、71 巻 5 号、748-755
- 益田早苗他、産科施設における妊娠期からの子ども逆阿智リスクスクリーニング調査 スクリーニング方法と有用性の検討、武蔵野大学看護学部紀要、11-19
- 尾形玲美他、児童虐待ハイリスク事例に対する個別支援児の行政保健師による保育所保育士との連携状況、日本地域看護学会誌、14 巻 1 号、20-29
- 小林恵子、子ども虐待事例検討会の実践による保健師の意識と支援の変化 アクションリサーチを用いて、日本看護研究学会雑誌、34 巻 2 号、131-152
- 光盛友美他、養育期における母親の子ども虐待の予防に関する研究 ベビーマッサージを体験していない母親との比較、日本小児看護学会誌、18 巻 2 号、22-28
- 永谷智恵、子ども虐待の支援に携わる保健師が抱える困難さ、日本小児看護学会誌、18 巻 2 号、16-21
- 山田和子他、保健師の児童虐待の認識、和歌山県立医科大学保健看護学部紀要、5 巻、33-40
- 守村里美他、ハイリスク母子への家庭訪問における保健師の支援の傾向と課題 家庭生活力量モデルを用いた初回訪問と継続訪問の分析から、保健師ジャーナル、64 巻 7 号、642-647
- 荒井葉子他、児童虐待防止のための医療機関と地域保健機関の看護職の支援と連携、人間と科学：県立広島大学保健福祉学部誌、8 巻 1 号、101-115
- 前田和子他、児童虐待に関わる周産期病棟・NICU 看護職者に求められるコンピテンシ -、沖縄県立看護大学紀要、8 号、39-47
- 頭川典子、市町村保健師による子ども虐待発生予防の実態と今後の課題、日本地域看護学会誌、8 巻 2 号、73-78
- 福島道子他、「家族生活力量」の視点に基づく児童虐待が発生している家屋に関する事例的研究、日本地域看護学会誌、6 巻 2 号、38-46
- 21 花田裕子、保育士が認識している不適切な親の育児態度と子どもの問題行動 育児支援における精神看護の役割、長崎大学医学部保健学科紀要、17 巻 2 号、5-16
- 22 木立由美子他、「虐待する」と言った若年未婚初産婦への支援 施設助産師としてのあり方、日本看護学会論文集 母性看護、34 号、127-129
- 23 樋口広美他、育児実態調査から見た子ども虐待のハイリスク要因 子ども虐待を早期発見・予防するために、保健師ジャーナル、60

- 巻 10 号、保健師ジャーナル、1006-1013
- 24 全国保健婦長会、子どもの虐待防止のためのハイリスク要因等実態調査 母子保健調査、地域保健、32 巻 6 号、60-81

5. 主な発表論文等

〔学会発表〕(計 2 件)

大澤 真奈美、坪井 りえ、塩ノ谷 朱美、鈴木 美雪、齋藤 基、丸谷 美紀、嶋澤 順子、乳幼児虐待予防に向けて乳幼児健診時に活用するアセスメント項目に関する文献検討、第 74 回日本公衆衛生学会総会、長崎市、2015

Manami Osawa, Miyuki Suzuki, Akemi Shionoya, Rie Tsuboi, Motoi Saito, Junko Shimasawa, Miki Marutani, Nursing interventions to prevent infant abuse, The 3rd KOREA-JAPAN Joint Conference on Community Health Nursing, Busan, 2016

6. 研究組織

(1)研究代表者

大澤 真奈美 (OSAWA, Manami)
群馬県立県民健康科学大学・看護学部看護学科・准教授
研究者番号：5 0 3 3 1 3 3 5

(2)研究分担者

齋藤 基 (SAITO, Motoi)
群馬県立県民健康科学大学・看護学部看護学科・教授
研究者番号：3 0 2 5 8 8 8 4

嶋澤 順子 (SHIMASAWA, Junko)
東京慈恵会医科大学・医学部看護学科・教授
研究者番号：0 0 3 3 1 3 4 8

丸谷 美紀 (MARUTANI, Miki)
鹿児島大学・医学部保健学科・教授
研究者番号：5 0 4 4 2 0 7 5

(3)連携研究者

鈴木 美雪 (SUZUKI, Miyuki)
群馬県立県民健康科学大学・看護学部看護学科・講師
研究者番号：9 0 5 5 4 1 2

塩ノ谷朱美 (SHIONOYA, Akemi)
群馬県立県民健康科学大学・看護学部看護学科・講師
研究者番号：7 0 5 5 4 4 0 0

坪井りえ (TSUBOI, Rie)
群馬県立県民健康科学大学・看護学部看護学科・講師
研究者番号：7 0 5 2 6 4 8 3